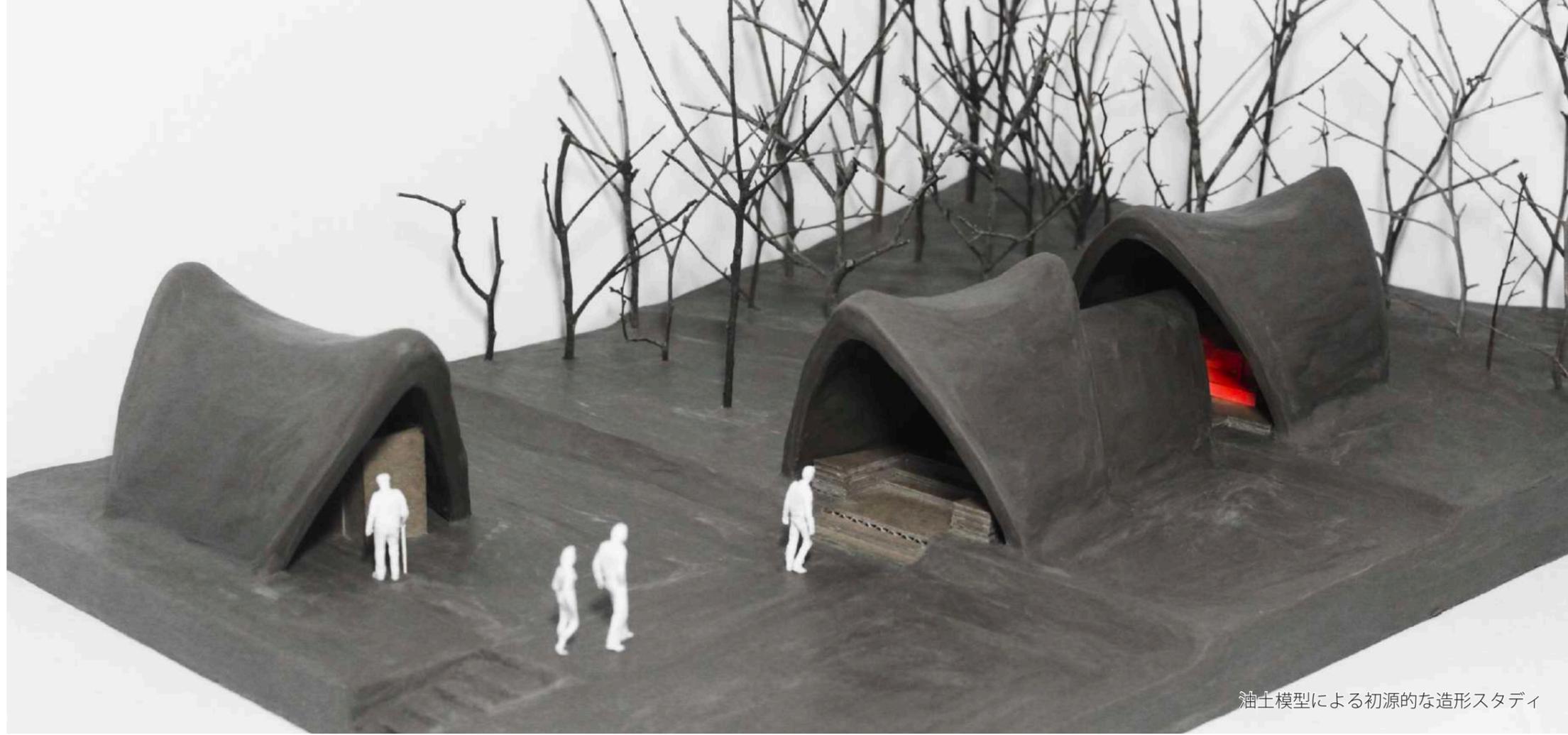


記憶の祖形

鹿児島県志布志市霧島神社（霧島六所権現社）建替計画

九州南部、鹿児島県志布志市松山の尾野見地区における複数の集落が、地域のシンボルである霧島神社の再建を目指し、2023年12月に設立した再建プロジェクト委員会による計画である。本計画では、神社本殿の鞘堂と拝殿、トイレ等の付随施設の整備を行う予定である。

敷地は集落の北に位置する高台にあり、豊かな木々に囲まれている。その自然環境の中で、参拝者が神社で手を合わせる時間は、自己の内面と向き合う自律的な時間であり、また、過去や未来と対話する他律的な時間でもある。この時間に対して、人類の記憶を想起させる祖形のような空間のかたちをほりおこす。それは、形式化される以前の初源的な形であり、どこかで見たような懐かしい形でもある。このような”記憶の琴線に触れる”新しい神社を提案する。



粘土模型による初源的な造形スタディ

Episode 1 鞘堂としての本殿の覆い

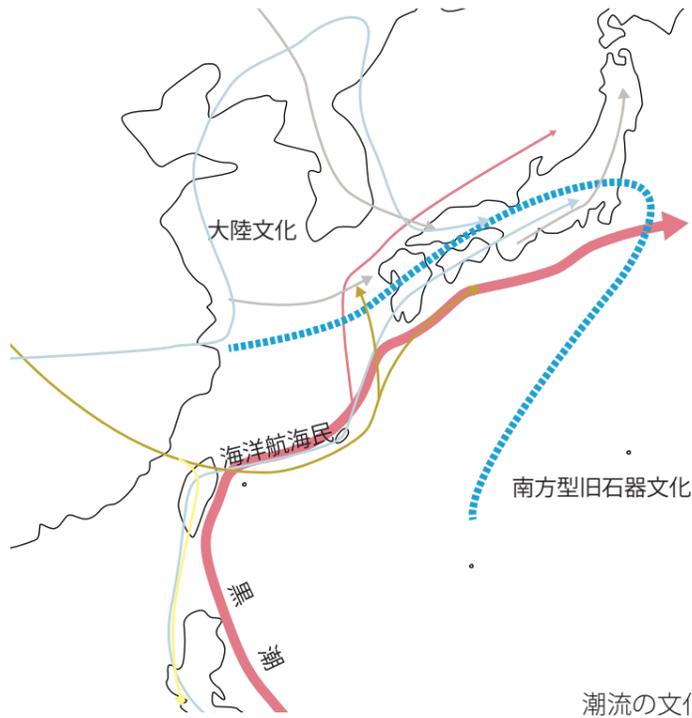
日本全国の多くの集落が維持する神社は財政的な困難に直面している。この神社を建て替えるにあたり、クラウドファンディングを実施することになった。これにより、地域内外の人々からの支援を受ける必要があり、実際に訪れてもらうきっかけを創出する必要がある。そのため、建築自体がアイコンックであり、かつキャッチーな存在であることが求められた。

一方で、私たちは1つの大きな課題に直面した。宮大工ではない我々が、長い伝統を持つ神社建築に携わることが許されるのかという問いである。しかし、現地を訪れ、調査とヒアリングを行う中で、現在の建築が本殿そのものではなく、本殿を守る覆いである『鞘堂（ふくどう／おおいどう／さやどう）』であることが判明した。つまり、これまで受け継がれてきた大切な本殿を守るため、建築の初源であるシェルターを提案する。



Episode 2 様式ができあがる前の形

一般に神社建築は、仏教建築が導入される以前の素朴な日本建築を伝えていると考えられている。しかし、その日本的建築に対する自覚は、むしろ仏教建築の導入によって喚起されたものであると理解すべきである。つまり、神社建築は大陸文化との対比によってその存在が確立されたのである。一方で、さらに他の視点から見ると、日本文化と密接に関係する日本海流（黒潮）の影響が根底にあることがわかる。例えば、天孫降臨や神武東征といった神話に見られるように、日本の西南部、特に南九州が近畿や関東にまで与えた影響がある。この文化をさらに遡ると、ミクロネシアの島々からの影響が見られ、倭族と呼ばれるトラジャ族（インドネシア）のトンコナン（正式名称：バアヌ）からの色濃い影響が確認できる。この黒潮文化の経路の中継地点が南九州であり、この地には隼人族と呼ばれる地域固有の文化が今なお継承されている。神社建築の源流を探ると、こうした広範な文化交流と影響が見えてくる。

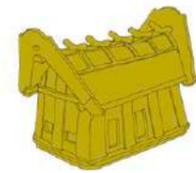


潮流の文化



Episode 3 モチーフとしての家形埴輪

そこで注目したのが、古墳時代に作られた家形埴輪である。中央集権による確固たる様式が確立する前の、多様性に満ちた時代に生まれたこれらの埴輪は、愛らしくもスタイリッシュな「素と惚けたかたち」を持ち、美しいプロポーションとオリジンとしての強い形態を表徴している。家形埴輪は日本文化における普遍性を象徴するアイコンックな形である。こうした時代を超える原初的な形を抽出し、それを現代の空間へと翻訳することで、私たちは現代に生きる人々の琴線に触れる空間体験を創出する。このプロジェクトを通じて、過去と現在を結びつける新たな建築の可能性を探求する。



群馬県伊勢崎市赤堀茶臼山古墳出土



宮城県西都市西都原古墳群出土



宮城県名取市 経の塚古墳出土



群馬県伊勢崎市豊城町出土



群馬県伊勢崎市上榎木字関出土



群馬県伊勢崎市今井出土